

変化に弱くすぐ苛立ち、落ち着かない自閉症児への 動作法のアプローチ

鉄, 拳
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/1448774>

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 1, pp.107-119, 2010-03-01. 九州大学大学院人間環境学府附属
総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：

変化に弱くすぐ苛立ち、落ち着かない 自閉症児への動作法のアプローチ

鉄 拳*

本稿では知的発達に重度の遅れがあり、言語や概念の理解が非常に困難である自閉症児に対し動作法を行い、その効果について検討した。クライアントは中学部に入り作業学習活動が多くなり、それに加えて引越しによる転校という環境の変化がきっかけとなって、駅に着いたら電車に乗らないと落ち着かないなどの強迫行動が出現するようになった。遊具を用いたプレイなどでは一人遊びになってしまうことが多く、クライアントとのコミュニケーションを成立させることが難しいが、動作を介したやり取りには少し応じてくれることが可能で、また、言語理解力が乏しかったため動作法を導入した。そこで課題に応じること、あるいは、課題中苛立ったところを少しでもその課題を続け、やり取りを持続させることなどの体験をすることを通して、生活全般が落ち着いてくることをねらいとし関わってきた。その結果、こちらからの関わりを理解し、応じてくれることで、気分の安定や人に合わせることも上手になってきた。また、気持ちのコントロール、他者への意識の理解や表出、人に合わせることも、安心して任せることが出来てきている。

キーワード：苛立ち、落ち着かない、自閉症児、動作法

I. 問題と目的

動作法は脳性麻痺による肢体不自由児者ばかりでなく様々な障害をもつ人に対して試みられるようになり、特に、自閉症児に対する「腕上げ」を動作課題としたセッションが対人関係や多動傾向に改善をもたらす（今野義孝、1983）と言われている。自閉症児は、身体を一定のスピードでゆっくり動かすということが苦手で、そこで、腕をゆっくり上げるといった動作を練習させると、その動作がうまくできるようになるにつれ、多動がおさまったり、他者とアイコンタクトがとれるようになってくるなどの効果がみられる。

自閉症児に対する動作法適用の効果を日常場面や他の課題場面との関係で捉える試みが進められている（藤田、2000）。これらの研究や報告によれば、自閉症児に対して落ち着いて物事に取り組めるようになる、他者とのやり取りが成立するといった効果が報告され、自己コントロールや対人的行動（やり取り）の変化の2つが主な効果として挙げられている。とりわけ対人行動の変化に関する報告が多く、動作法の効果は対人行動の変容という捉え方が一般的になってきている。さらに

*九州大学大学院人間環境学府

動作法の効果として、個人の気持ち、動作、感情といった様々な側面についての自己コントロールがある（針塚、1994）。対人効果にも他者に合わせることで、安心して他者に任せられることなどの側面からの効果があると考えられる。

清水・小田（2001）は頻繁にパニックを起こす自閉症生徒に対し動作法を適用し、パニックの減少に及ぼす動作法の効果について検討した。結果、動作法によるリラクゼーション課題の進展に伴って、家庭及び学校場面でのパニックの頻度が顕著に減少してきた。それは、動作法において意図的に力を抜く努力ができるようになってきたこと、心身の十分なリラクセス体験ができたこと、指導者との密接な関わりが快い共有・共感体験となったことが、緊張や興奮に対する自己コントロールを高める要因になったことによるものと考えられた。これらのことから動作法は、パニックを頻発している事例に対する、自己コントロールを高めるための有効な援助法になりうることが示唆された。

自閉症児、肢体不自由を主訴としない対象者は、動作そのものの改善が主なねらいではなく、子どもに働きかけていくための媒介として動作課題が用いられることとなり、自閉症児や知的障害児における行動特性の変容がそのねらいとなる（森崎 2002）。

自閉症児の中で多動的傾向を伴う子どもの場合においては、臨床動作法の適用に伴って多動的な傾向が落ち着いていくということがたびたび観察される。これは、動作課題を通して一緒に体を動かしていく中で、子どもがしだいに自分自身の体の部位を対象化し、ゆっくり自己調整することができるようになっていくことにより、行動そのものが全体的に落ち着いていったものと考えられる（森崎 2002）。

自閉症児の強迫的な「トイレ行動」の減少および消失を目的として臨床動作法を適用した結果、自己自体感覚および自己運動感覚の変化がみられ、さらに、自己コントロール感の変化が観察された。標的行動であったトイレ行動が完全に消失し、さらには「もう行かない」と自ら言うなど、自己の行動を自分自身で認識し、自己を統制する力が身につき始めた。これらの変化は臨床動作法の自らの体を制御する力の育成や不安・緊張に軽減には有効であったと考える（長谷部 2004）。

自閉的な子どもを対象とした動作法の実験報告においては、自閉的な子どもの多動的な傾向が落ち着いていくということがこれまで多く報告されてきている。その点に関して、落ち着く「ゆったりとした感覚」と「自己調整」感の獲得がその背景にあり、動作法を適用する際の重要なポイントとなっていると考えている（森崎 2009）。

本研究では動作法のこういった特性を生かし、自閉症児の落ち着かなさや苛立ちに対し、その効果を考察する。

Ⅱ. 事例概要

1. クライアント（以下 CI.）：中 1 男児
2. 他機関診断名：自閉症（3 歳時、T 県療育センターにて）

3. 主訴：子どもがここ半年位様子が変わってせっかちになり、これからの対応を相談したい。

4. 保護者面接の内容

「ここ半年くらい、全てにおいてせっかちになった。例えば電車が来るのが待てず、ホームに着いてすぐ乗れないと落ち着かなく、説明してもあまり効かない。食事のときも座ったらすぐご飯が出てこないと気が済まない。強迫的行動、こだわりが生活全般に見られる。スケジュールが頭の中にあって、その通りにしないと気が済まない」といったことが話される。

5. 知能検査の結果

田中ビネー V を実施

知能指数 (IQ) = 12

生活年齢 (CA) = 12 歳 11 ヶ月

精神年齢 (MA) = 1 歳 7 ヶ月

6. インテーク時の様子

キャッチボールでは<投げて>と声をかけたり投げるようにジェスチャーで示したりすればボールを投げてくれるが、やり取りをしている感じはあまりない。黒ひげを片付けると、急に機嫌が悪くなったようで「帰る」とドアに張り付く。インターカーが<急に変えて、ごめんね>と謝るがインターカーの体を叩き、退室する。

<ボール遊びをしよう>という誘いにもほとんど反応がなく、口の中に手を入れ、他のところを見ながら「メ！メ！メ！」と声を出す。ギッコンボタンなどの体を使った遊びをしてみると、若干視線も合いやすく乗ってくる感じがする。そこで動作法による関わりを試みる。坐位での肩上げ課題では当初 Cl. の主動的な動きはあまりない。何度か繰り返すと課題を理解できたのか、少し応じてくる。腕上げ課題ではインターカーに応じて上げていく動きが出るが、あまり持続せず、じつくりと課題に取り組むことは難しかった。他の遊びよりは関わりが持ちやすい印象。

7. 見立てと方針

Cl. との関わりにおいては、遊具を用いたプレイなどでは一人遊びになってしまうことが多く、Cl. とのコミュニケーションを成立させることが難しいが、動作を介したやり取りには少し応じてくることが可能であった。そのため、その中で課題に応じること、やり取りを持続させることなどの体験してもらうことを通して、他者の意図や周りの環境の理解力が伸びてくることで、生活全般が落ち着いてくることを狙いとしたセラピーを行った。

Ⅲ. 面接経過

全 19 回のセッションを 4 期に分けて報告する。以下、Cl. の発言を「 」、Th. の発言を< > で表示する。

第 1 期、動作法の導入、関係づくり (#1~#5)

#1 X-2 年 11 月 22 日

しばらくブランコで遊んでトランポリンに行く。「デタ、デタ」と言いながらトランポリンから降りる。〈ちょっと休憩しようか〉と誘いながら座ってもらう。あぐら座をしてもらって、肩を持ちながら〈はい、肩を上げて〉と働きかけをしてみると両手を支えながら上体を起こしていく。〈違うよ、肩だけだよ〉と肩を上へ持ち上げながら教える。片方ずつ何回かやった後一回肩上げ課題の確認をする。あぐら座では少し応じてくることが出来ているため、仰向けでの腕上げ課題を試してみる。腕上げを何回かやった後 Cl. があきたようで「ヤ、ヤ、ヤ」と発語し、手足を振り回して、Th. の手を掴んで嘯もうとする。

#2 X-2 年 12 月 13 日

楽しそうにトランポリンで回りながら跳ぶ。Th. と手をつないで跳ぶが、あまり長く続かない。また、〈すごいね〉と言いながらブランコを揺らすと楽しそうに笑顔でブランコで遊ぶ。〈少し休憩しようか〉とあぐら座をとらせると背中が曲がっている。後ろから背中を伸ばす援助に少し応じてきて、背中を伸ばしていく。あぐら座での背反らせ課題で、背中に緊張が入ってないためとてもスムーズにできる。〈肩を上げて〉との指示に Cl. が両手で体を支えながら上体を起こしていく。Cl. の両手を持ちながら肩上げの援助をする。途中で「ヤ、ヤ、ヤ」と言い始め、動作課題は 10 分程度で終わる。

#X-1 年 1 月 10 日 (Cl. が体調不良でキャンセル)

#3 X-1 年 1 月 24 日

エレベーターに乗る時に〈何階でしょう?〉と聞くと「いち」と答えて、会話の中で初めて返事をする。ブランコで遊ぶ時に前にあるトランポリンにぶつかりそうだったので、Cl. に降りてきてもらって置く位置を変えるように伝えると降りてきて落ち着いて待つ。サッカー遊びで〈すごいね〉と褒めてあげると手を叩きながら頭を揺らして嬉しそうにする。

プレイで気分がよくなってきたところで、あぐら座課題をする。背中が曲がっていたので真っ直ぐに座るように援助し、肩を上げるように伝えると、いつもと同じように両手を支えながら上体を起こそうとする。何回か援助しながら上げ下げをした後、肩を上げるように促すと背中に力が入りながらも肩を上げていく動きが出てきた。また、仰向けでの腕上げ課題で援助を外して〈上げて〉との声かけに Cl. が腕を上げる動きが出てくるが途中で止まって上げなくなる。Th. が少し支えながら上げていくように援助すると上手に上げていく。

#X-1 年 2 月 14 日 (Cl. が体調不良でキャンセル)

#4 X-1 年 2 月 21 日

あぐら座での直の姿勢を作る。背中が曲がっていて、〈背中を伸ばして〉との声かけに応じて背中を伸ばしてくる。その後、あぐら座での背反らせ課題をする。〈力を抜いて〉に応じて少し力を

抜いて背中を反らしてくる動きが出る。

肩上げ課題では、いつものように両手を支えながら上半身を起こそうとする。Th. から何回かの〈違うよ〉との指摘に「ヤ、ヤ、ヤ」と発語してイライラになる。課題を変えて腕上げ課題をする。〈はい、上げて（下ろして）〉との声かけをしながら腕上げをする。うまくできたところで、〈もうちょっとゆっくり上げて〉との指示に応じてゆっくりと上げていく。

#5 X-1年3月8日

膝立ちをするよう働きかけると両手で膝を抱きながら座る。膝立ちから正座をさせるとき、〈はい、座って〉と働きかけるとあぐら座をしてしまう。〈お尻を下ろして〉との声かけにきちんと膝立ちから正座をする。Th. の顔を見つめてきてしばらく視線を合わせる。正座から膝立ちをする時に、〈少し手を引っ張りながらもうちょっとゆっくり立ってみようか〉と言うとゆっくり立ってくる。膝立ちで左右の重心移動では、Th. に頼り過ぎで自分で踏ん張って安定する動きは少ない。

Mo.との面接：

生活の中で困っていることは前と一緒（待てない）。けれども、電車に乗るときはちゃんと後三つとか後二つとかをはっきりと教えると待てる。前と比べたら少し落ち着いてきている。今までは自分の考えていることを伝えることはまったくなかったが、最近では自分でトイレに行きたい時はちゃんと「トイレ」と片言で言うようになってきている。学校ではこの前名前を呼ばれたときに初めて「はい」と返事をした。学校では最近一人の女の子がいつも話しかけてくる。学校の帰りにその子にさよならの挨拶をする。

気になっていたCl.の自傷行為も最近落ち着いてきて自傷行為はないという。困っているのは、病気になった時自分の体の痛いところを伝えることができないので困っている。

第2期、Th.の要求に少し応じてきて、待てるようになる時期（#6～#10）

#6 X-1年4月13日

あぐら座での直作りでは、背中を指で指しながら〈ここを伸ばして〉と声かけをすると伸ばしていく。〈手で支えなくても出来るね〉と声をかけると笑顔でTh.を見る。

いつも行っている仰向けでの腕上げ課題を確認すると、腕に力を入れて早くあげようとする。〈もうちょっとゆっくり〉と言いながら上げていくことを求めると、少しイライラした様子を見せるが、その後落ち着いてくる。もう少し自分の体に注意を向かせるために膝立ちでの重心移動課題を行う。重心が左右にのったまま維持するように働きかけたがなかなか安定できない。気分がイライラする前にTh.と一緒に歩く課題をする。〈左（右）足を出して〉と伝えるが、働きかけにどうしたらいいか分からなく戸惑う。

#7 X-1年5月8日

初めてTh.にくっついてきて、手を掴んで一緒にプレイルームに行く。あぐら座での直の姿勢づくりをする。背中を伸ばして直の姿勢を作ってもらおうと、指示に応じてスムーズにできている。あ

ぐら座での肩上げをさせてみると、Th. の援助に従ってうまく肩上げをしていく。他者の要求に応じさせるため、あぐら座で向き合い、Th. とお互いの手を押す動きの課題でくはい、手を押してくになかなか押してくる反応はなかったが、やっていく内に手を押してくる動きは少し出てきた。また、Th. と手を合わせてタッチする。何回かやってもほぼ間違いなくできている。

#8 X-1 年 5 月 15 日

他者の要求理解を促したり、自分の体に注意を向かせるために一緒に歩く課題をする。く左足を出してくに戸惑う。Th. がもう一回指示すると、片足でジャンプをしたりする。ほとんどの課題では Th. の指示を理解していない様子がうかがわれた。

いつもの行っている課題をしていく。あぐら座で背中が曲がっていて、く背中を伸ばしてくに両手を床に付けて上体を起こし、お尻を浮かそうとする。く違うよ、手は膝の上に置いてくに応じる。首にまで力を入れて肩を上げていく。く首は真っ直ぐにくとの指摘にあまり応じない。

片膝立ち課題をすると Th. に頼り過ぎてしっかりと踏みしめない。く自分で足に力を入れて踏ん張って立ってくといいながら膝を持って援助すると応じて立ってくる。膝立ちでの重心移動課題では片方に重心をのせたままくこのまま維持してみたくに立ってくる。膝立ちでは少し出来てきたので、立位の中で行ってみる。立位での重心移動ではのってくるが、しっかりと踏みしめない。

#9 X-1 年 6 月 26 日

上体のリラックス目的で躯幹のひねり課題を行う。く肩を開いてくにあまり反応がない。肩を開き終わったら逆に伸ばしていく動きをする時にく手を真っ直ぐに伸ばしてくに少しだけ伸ばし、すぐに肘を曲げたり手を上げたりする。何回かく違うよ、足はそのままだよと指摘すると怒ったように「メ、メ、メ」と発語する。課題を変え、あぐら座でく手は使わないで、前に置いてから背中を伸ばしてくに手をちゃんと膝の上に置いて少しの援助で背中を伸ばして直の姿勢を作っていく。Th. の指示を理解できないことがみられるため、言葉で膝立ちをするように促すと膝を抱いて座る。実際手本を示して見せても真似して膝立ちをすることは出来ない。正座から膝立ちにする動きでくもうちょっとゆっくり立ってくにサッと立ち上がったたり、くゆっくり座ってくにもサッと座ったりして、細かいところでの自己コントロールが難しい。

#10 X-1 年 7 月 10 日

腕上げ課題ではくはい、上げますくと伝えると上げていく。細かいところでの自己コントロールを促すため、途中でくここで止まって、少し待ちましょうねくに腕を動かさず待つ。くはい、もうちょっとゆっくり上げていくくと言いながらゆっくりのペースで上げていく。片手だけの援助でくはい、上げるよくと伝えるが反応はない。腕が上がってきたところで援助を外して手の平だけ Cl. の腕につけて誘導する。途中、手が離れていくこともあったが、く外れているよくと言いながら腕をつけるよう援助するとついてくる。援助を外してく腕を上げてみようくに反応はない。Cl. は「デタ、デタ」と声を出し、怒る。くはい、疲れたね、起きて座ろうかくと声をかけると落ち着く。

Mo.との面接：

クラスが変わったが、前の友だちが何人か一緒にいて、そして今の担任がうまく対応してくれているみたいなので、そんなに落ち着かない様子ではない。最近暑くなっているので本人がイライラすることが多い。食欲もあまりないかなと最近まで心配していたが、今はよくなっている。家で周りのものが気になっていつも緊張している。寝ている時しか休めていないかなと思う。最近 Mo. の方もイライラが多いという。

第3期、落ち着いてきた時期（#11～#15）

#11 X-1年7月24日

側臥位での腕上げ課題で<はい、腕を上げていくよ>という声かけだけで、Cl. が主動的に腕を上げていく。細かいところでの自己コントロールを促すため、<ここで少し待ちます>と伝えると応じる。援助を両手から片手、さらに指一本にするなど、援助を段々外していく。最後に援助を外して<はい、上げて>と伝えるが上げてくる反応がなかったので、Th. から Cl. の腕を指で指しながら<上げてよ>と伝えると腕を上げていく動きが出てくる。

座位では曲がっている背中を指しながら<ここ伸ばして>というと、両手を床に付けて上体を起こし、お尻を浮かそうとする。<手はいらない>というと手を外していく。初めて課題の中で声かけだけでスムーズに手を外して指示に応じることができた。

Cl. が苦手な膝立ちでの重心移動で<はい、左に乗って>と左に重心をのせていく。左足に力が入ってなかったので、<はい、ここで自分で踏ん張って立ってみて>というと、力を入れて姿勢を維持する。

外界の環境や他者の要求などが変わった時の本人の気持ちの切り替えがスムーズに出来るように、動作課題の中でもいつもと違った体験をさせ、その中で本人の気持ちの切り替えを促していく。具体的な課題として、座位で Th. と向き合って座り、手を握る・開く課題をする。Th. から手を握る・開く動きの手本を見せた後に Cl. にしてもらう。最初はうまく出来ていなかったが、段々<握って>に手を握ってくるようになる。

#12 X-1年8月10日

背中リラックス課題を行う。背反らせ課題の途中、手を口の中に入れる動きが頻繁にみられ、<手は下ろすよ>と伝えるとすぐ降ろしていく。

他者の指示に従うことや自分の体に注意を向かせることをねらいに、腕上げ課題の途中で<はい、ここで少し待つね>、<もうちょっとゆっくり上げよう、もうちょっと早く上げて>などの動作を止める働きかけをすると応じてくる。

楽しい体験を目的にダッチをする。両手で力強くしてきたので<もうちょっと優しくして>と伝えると弱めにする。

#13 X-1年8月24日

背そらせ課題では少し反らした後、起き上がろうとする。<もう少し伸ばそうか>と伝えると応

じてくる。細かいところでの動きを促すため、座位での肩上げ課題で止まったところで<ここで少し待ちましょうか>と話かけ、少し待ったところで<もう少しあげようか>と伝えると力を入れてあげていく。「ヤ、ヤ、ヤ」と発語して、腕をサッと上げるので、<もう少しゆっくり上げようか>と話しかけながら、ペースを落していくと抵抗はない。ゆっくり腕を上げていくうちにCl.が落ち着いてくる。躯幹のひねりでは、Th.の指示だけで自動的に腕を伸ばしていくようにすると、応じてきて、Cl.が自分で腕を伸ばしていく。

立位での腕上げでは、Th.が指をCl.の腕の上に置いてから上へ上がってくるように誘導する。初めは指の動きについて上げてくるが、途中で上げなくなる。

#14 X-1年9月12日

あぐら座をするように促すとTh.に向いて座る。<反対を向いて座って>に応じてくる。腰が少し曲がっているのが、指でさしながら<ここ伸ばして>に応じて伸ばしていく。

腕上げ課題ではTh.が腕を持ちながら上げていくと応じて、一緒に上げていく。仰向けでの足の上げ下げ課題では、<足を上げるよ>と伝えると上げてくる。止まったところで少し待ってから<はい、下ろしていくよ>と伝えると下ろしていく。声かけなしでTh.から上げようとする動きをするとCl.は一緒に上げていく。

膝立ち課題では、左右に乗せる動きをさせようとするがなかなかうまくできず、表情も硬い。

#15 X-1年10月1日

あぐら座で背中が真っ直ぐするように声をかけながら指で指すと少し伸ばしていく。肩の開き課題で<開くよ>と声をかけると開こうとする。仰向けでの腕上げ課題では、片手をCl.の腕の上に置いて誘導して上げていく。肘が曲がりがちで、途中から真っ直ぐに伸ばすよう援助する。Th.の声かけだけで上げていくようにすると、応じてくる。

また、細かい動きでのコントロールを促した手を握る課題ではTh.の<握って>という声かけに真似しながら手を握っていく。<開いて>に真似して開いていく。片手で開くときにゆっくり小指から一本ずつ開いていくように手本をみせながら説明した後にさせると、うまく一本ずつ開いていく。また、握る時に人差し指から一本ずつ握っていくようにさせると、Th.の手本をみながらやっていく。片手ずつさせた後に両手でするように声かけるが、うまくできない。

Mo.との面接：

この前Cl.が初めて、Mo.以外の人（ヘルパー）とお出かけをした。この間、Mo.の実家に行ってきた。飛行機に乗る時に困らなかった。学校が始まる前はCl.の気分が変わるのではと心配。少し学校の行事などで疲れていること以外は学校と家で特に問題はない。運動会でうちわを持って歌舞伎の踊りみたいに踊ったりした。その中に片足でジャンプする動きがあって、Cl.がうまくできていた。今月の終り頃に二泊の見学旅行があり、少し心配という。

第4期、落ち着いて、安定してきた時期（#16～#19）

X-1年 11月27日 Cl.が体調不良でキャンセル

（Mo.が電話で、最近とても落ち着いている。この前結婚式に行ってきたが、Cl.がちゃんと場面に自分を合わせるようになってしていると嬉しそうに話される。）

#16 X-1年12月4日

肩開き課題の中で、最初はTh.から開くように誘導してから、Cl.に自分で開いていくように促すと、少しだけ応じる。

リラックスや体を動かすことを目的に行った軀幹のひねりで前に腕を伸ばす動きをしてもらうと応じる。段々言葉での指示だけで積極的に伸ばしていくようにすると、応じることができた。自分で伸ばしていく。だが、最後まで伸ばすことはまだ難しい。椅子座での腕上げをする。Th.から両手で援助し途中止まったりするが、Th.の援助で上げ続けていく。上がってくると肘が曲がってくる。Cl.に自分で上げるように促すが、反応はあまりない。

#X-1年12月18日 お腹の調子がよくないことでキャンセル

#X-1年12月25日 インフルエンザでキャンセル

#17 X年1月8日

Mo.がスリッパを履き替えようとする時に、「ヨッシヨ、ヨッシヨ」と声を出す。

あぐら座で背中が曲がっていて、指で指しながらくここ伸ばして>にスッと伸ばす。肩の上げ下げ課題をすると、いつもよりスムーズで、自分で動かしている感じがあったので、<今度自分で上げてみて、はい、せーの>と促すとCl.から自分で肩を上げてくる。

より細かいところでのコントロールを促すため、腕上げ課題で<今度自分でゆっくり腕を上げてみて>と伝えると自分で上げていく。前回と違って、自分で腕上げを出来ている様子がみられた。

#18 X年1月29日

腕上げ課題では、<今度自分ひとりで上げていくよ、いい?>と言って上げるように促すと、自分で上げていく。前回から自分で腕上げを出来ている様子がみられる。

いつも行っている肩あげ課題では、Th.が腕を持ちながら<肩上げて>にスーと上げていく。<はい、降ろして>にも応じてくる。

Th.の指示や要求への理解が難しかった膝立ちでの重心移動をして、他者の指示理解や自分の体に意識させるため、膝立ちをするように促すとしてくれる。重心移動で右足に乗った後、<はい、今度先生が手を外すので、自分でこのまま立てるように足に力入れて>と声かけながら外していくとちゃんと自分で立つ。同じように重心を左に乗せて自分で維持するように促すと応じてくれる。

#19 X年2月19日

座位では直作りや肩上げ課題以外の課題を取り入れて、いつも違う体験をさせるためあぐら座での前屈課題を行う。ぎりぎりのところまで伸ばした後に、そのまま維持して待つように声をかける

と伸ばしたまま待つ。<もう少しここを伸ばして>といいながら腰を指すと伸ばしていく。

側臥位での腰の前後の動きを行い、腰周りの弛め課題をする。途中膝が曲がって上がってくるので真っ直ぐに下へ伸ばすように指示すると少しだけ応じてくれる。

Mo.との面接：

この間、T 県に結婚式で行ってきた。親戚の人たちに、お兄さんになったと褒められた。最近ずっと落ち着いていて、イライラも少ない。そして、こちらからの言葉をちゃんと理解している。何を言ってもちゃんと通じている。漫画の本を読んであげても分からないかなと思っていたが、割と分かっている。学校でもちゃんと集団で行動するようになってきている。また、この前学校の先生が掃除道具を取り出すと Cl. が自分で「掃除」と言っていて、言葉も少しよくなってきているという。

セラピー中の映像からも、ちゃんと指示通りに出来ているのがよく伝わってくる。

最近の 2、3 ヶ月前から人に目線を合わせることが多くなってきた。それで自分の考えていることを伝えたり、他人の様子を確かめたりしている。

お腹の調子も以前より良くなってきている。最近歌も歌うようになってきている。家とかではよく歌う。今から卒業式の準備、また春になってきているので本人が落ち着かなくなるかなと少し不安という。

IV. 考察

インテーク時、動作法によるセラピーをすることで生活全般が落ち着いてくることを狙いとし、受理したケースで、Cl. は知的発達の遅れが重度、言語や概念の理解が非常に困難で、加えて対人的な疎通性が低いことが特徴的であった。よって、セラピーの始めのセッションでは Cl. がこちらからの促しや指示が分からず、また、新しい環境への適応もできていなかったため、仰向けでの腕上げで「ヤ、ヤ、ヤ」と手足を振り回したり、Th. の手を掴んで嘯もうとしたりして (#1)、肩上げの課題で「ヤ、ヤ、ヤ、」と言い始める (#2) など課題中に苛立ち、落ち着かなくなることがしばしばみられた。そこで、最初の一、二回のセッションでは Th. と Cl. が相互的に理解し、慣れてくること、また、Cl. の環境への理解や適応を目標にして関わった。Th. からの<違うよ、肩だけだよ>などの連続の指摘に不機嫌になることがあるので、課題中こちらからの声かけとして直接指摘しないことを意識しながら課題を進行していった。Cl. の応じ方が間違っていたら、こちらからの関わりとして、声かけの仕方を直接指摘しないで、まずはそういうように理解しているのだと Cl. のありのままを受け入れてから、こちらからの課題をより明確に伝えるとともに細かいところまでどう動かしたらいいかを Cl. に教えていった。このような関わりを繰り返していくうちに Cl. が少しずつ Th. の促しや指示を読み取ることができ始めた。

具体的な課題として、肩を上げるように伝えると、いつも両手を床に付けて上体を起こし、お尻を浮かそうとする応じ方をすることが多く、それを<違うよ>と直接何回も指摘するとイライラし

てくるので、声かけとしては「今回は手を使わずに肩だけ動かしてみよう」のように細かいところまでの動かし方をより明確に伝えていった。また、Cl. がどう理解し、考えているのをこちらで理解してから、まずその理解の仕方や考え方を受け止めて、そこから少しずつこちらの指示や促しを明確に伝えていった。動かし方への援助では、肩を上げるような促しに両手を支えながら上半身を上げようとする時、声かけ以外、Cl. の両手を動かさないように持って肩だけ動かせるようにしておいて、肩上げ課題をさせていくと本人も肩を意識し始めることにより、少しずつ Th. の要求を理解してきたと思われる。

初めのセラピーでは Cl. が少し落ち着いて課題に応じてくるが、すぐに苛立ち、イライラすることが多かった。Cl. の注意や気持ちを変えるため、また、イライラした気持ちを転換させるため、行っている課題を素早く変えていく中で、建物と Th. の指示や促しの理解などが上達し、四回目のセッション中ずっとこちらからの働きかけに応じるなど、課題への取り組みもよくなってきたと思われる。Cl. が苛立ちや落ち着かなくなったときに行っている課題を素早く変えることで Cl. のその時の気分や注意を新しい課題へ持っていきように関わった。そうすることで Cl. が気分の転換や注意の視点が変わり、苛立ちや落ち着かなさが収まってきたと思われる。

Th. からの声だけの働きかけに対し、言語理解の難しさなどがあり、Th. の要求がはっきり分かっていないため途中で動きが止まり、また、具体的な援助がないことでどうすればいいかわからないことで不安が生じたと考えられる。例えば、腕上げ課題で援助を外して「上げて」との声かけに Cl. が腕を上げる動きは出てくるものの途中で止まって上げなくなった。Th. から少し支えながら上げていく援助をすると上手に上げていった。そういう声かけだけの促しに対する Cl. の要求や指示の理解や不安の解消をするため、Cl. の動きが止まって、戸惑ったところでこちらからその課題が進行していくよう援助した。そうすることで課題の理解などの Th. の要求や指示を分かってくるようになると思われる。また、他者や環境への理解、認識がよくなっていくことで気分の落ち着かなさや苛立ちの生じることを収めると考えられる。

課題への理解、応じてくることが少しできてきたところで、課題の中でより細かいところまで意識化させて応じてくることを狙った。Cl. の理解や、認知をより細かいところまで援助できたと思われる。具代的な課題として、腕上げ課題で Cl. が早く上げようとするときに「もうちょっとゆっくり上げよう」と要求し、応じてくるよう促すと少しイライラしたが、その後落ち着いて応じてきた (#6)。

Cl. とある程度相互的に理解でき、慣れてきた段階で、課題中 Cl. が苛立ち、落ち着かなくなってきたとしても、行っている課題を継続し、少しでもそのイライラする場面を本人に直面化させ、落ち着いてくるよう援助した。そうすることで Cl. の日常生活の中で苛立ちや落ち着かなくなった時の自分の気持ちや考えを少しでも理解できるようになってきて、生活全般が落ち着いてきたと考えられる。具体例としては「ヤ、ヤ」と発語し、苛立ち、腕をサッと上げていくところを「もう少しゆっくり上げようか」と話しかけながら、ペースを落とし続けて腕上げ課題を行っていくように援助すると抵抗なく、続けていくうちに段々落ち着いてきた (#13)。課題の中で Cl. が他者に身を任せるこ

とや他者に合わせることで、そして、身の回りの状況理解、環境の理解などが上手くなってきたと思われる。その結果、苛立っていた気持ちが落ち着いてきたと推測される。

V. 今後の課題

インテークの時、Mo.の主訴でCl.がここ半年位様子が変わってせっかちになり、落ち着かないとのことだったが、いまでは家と学校ではとても落ち着いてきている。けれども、新学期や季節といった環境の変化にまだイライラすることがある上、他者に合わせることや身の回りの状況理解などがまだ援助が必要と思われるところがあるため、これからのセラピーの目標としてはCl.の細かいところでの気持ちのコントロール、そして理解力と適応性の向上などを狙いとする動作課題を中心にやっていくことが必要と思われる。

(謝辞)

この論文の作成に際して、九州大学大学院人間環境学府 針塚進教授及び大学院博士課程3年宮里新之介さんのご指導とご助言を受けましたことを記して感謝いたします。

引用文献

- 今野義孝 1983 腕あげ動作コントロール訓練における自閉症児群、多動児群、学習障害児群の訓練経過の比較 文教大学教育学部紀要 17、38-50
- 今野義孝 1985 発達障害児に対する動作法の展開 文教大学教育学部紀要 19、55-64
- 清水謙二、小田浩伸 2001 自閉症生徒におけるパニックの軽減に及ぼす動作法の効果：学校および家庭におけるパニックの頻度の変化（実践研究特集号）特殊教育学研究 38（5）、1-6
- 長谷部尚代 2004 ある自閉症児に対する行動療法と臨床動作法の効果についての一考察（平成15年度文学研究科修士論文要旨）愛知学院大学文学部紀要 34、207
- 針塚進 1994 情動活性化からみた自閉性障害児への心理臨床の展開 九州大学教育学部附属障害児臨床センター編 発達と障害の心理臨床 九州大学出版会 179-192
- 藤田継道 2000 動作：行動（観察可能な身体運動）と体験（内的な心理現象）[現代のエリプス] 別冊実験行動学—身体を動かすところの仕組み—成瀬悟策（編集）至文堂
- 森崎博志 2002 自閉症児におけるコミュニケーション発達と臨床動作法 治療教育学研究 22、41-47
- 森崎博志 2009 自閉症児への動作法—理論的背景と基本的な手続きについて— 治療教育学研究 29、19-26

The Effects of Dohsa-hou on Autistic Child for Irritated and Restless Behavior Caused by Environmental Change

Ken TETSU

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

The purpose of this study was to investigate the effects of Dohsa-hou on the children with autism and severe mental retarded who does not understand language and concept. Client A entered junior high class of Special Needs Education School and had to work much more for occupational learning. In addition, big change of environment as moving to new place and changing school caused his compulsive behavior. In therapy, it was possible for him to react though Dohsa-hou to therapist a little. So that keeping react to the task even he got irritated and gain experience of continuing interaction with therapist were purposes for his composed living life. As a result of sessions, he got possible to understand and show reaction to therapist's intention. Furthermore, he came to adjust to sudden change of schedule controlling his feelings. In conclusion, understanding of other intention and showing self expression were improved though Dohsa-hou session.

Key words : get irritated, restless, autistic child, Dohsa-hou